

tomorrow

【特集】
プロヴァンス、光の幻想

town navigation
クルマで行く旅

古都、金沢。

tomorrow interview
貴島サリオ



プロヴァンス、 光の幻想

澄みきった空を渡る風が、
豊かなハーブの香りを運んでくる。
あふれんばかりのプロヴァンスの陽光は、
自然を慈しみ、歴史の影を包みこむ。
古代と現代の時の隔たりを消してしまう光の幻想。
ここではすべてがなつかしく、やさしい。

古代の夢の中にまどろむ町

グラン・ローヌ川のゆったりとした流れを背景に、オレンジ色の屋根の古い家並みが、人影のまばらな石畳の路地に影を落としている。

古代の円形闘技場の上から見たアルルの町は、真昼の光の中でそっとまどろんでいるかのようだ。静かな町に教会の鐘の音が響きわたり、闘技場の苔むした石の窪みから鳩がいつせいに飛び立つ。中世に要塞と化したこの闘技場は、物見塔と銃眼を備えている。かつて銃が火を吹いた穴は、いまは鳩の格好の休憩場所らしい。

それにしてもこの円形闘技場の大きさは圧倒される。136×107メ

ートルの楕円形の建物は、二層になった60ものアーケードにとり巻かれている。アーケードの向こう側にひしめく家々が、おもちゃのように見えてしまう。

古代ローマ時代、この闘技場では猛獣や剣闘士たちの残酷な見せ物が繰り広げられ、2万人以上もの観衆のどよめきが響きわたっていたのだ。

地中海をのぞむプロヴァンス地方には、ローマ時代の遺跡が多く残っている。プロヴァンスという名も古代ローマの属州「プロヴィンキア」から来ている。なかでもアルルは「小ローマ」と呼ばれるほど、ローマの影が濃い。紀元前1世紀の円形闘技場と広大な地下回

廊、古代の神殿跡のフォーラム広場、古代劇場、4世紀の宮殿の大浴場、墓地アリスカン……。シャトーブリヤンの言葉を借りれば、アルルの町は、プロヴァンスの古代、中世の繁栄の跡を陳列した「野外博物館」なのである。

円形闘技場は、巨大な石の冠のように、いまも町の中心に鎮座している。だから夏の闘牛祭などの催しのない普段の町は、真ん中にぽっかり穴が開いたような気だるい空虚感をたどらせている。

がらんとした闘技場の中は、四方から風が吹き抜ける。そのとき、ふと風の中に香りを感じた。さわやかな酸味のあ

なく、町全体からふわっとただよってくるようだった。

切符売り場のマダムが、その香りの正体を教えてくれた。

「ああ、これはね、シトロネル、シトロネルの香りよ。歌うように言いながら、手で何かをすりつぶす仕種を試みせた。シトロネルとはレモンの香りのするハーブ(香草)のことだった。このハーブをすりつぶしている匂いが家々の窓からただよっていたのだ。それは、歴史の夢の中に埋もれたような古い町に生きる人々の、ささやかな生活の匂いでもあった。



2層になったアーケード



アルルの町並み。グラン・ローヌ川が流れる



巨大な円形闘技場。現在は闘牛が行われることもある



ラヴェンダーの香りに誘われて

初夏から夏にかけて、プロヴァンス地方はさまざまなハーブの香りに満たされる。緑の野や白い岩肌の山麓から風にのって匂い立つ、タイム、ローズマリー、サリエット、そしてプロヴァンスの香りを代表するラヴェンダー。

プロヴァンスの乾いた空気とあふれるような陽光が育てるラヴェンダーは、他の産地のものに比べてやや強い芳香に特徴がある。この地方のみやげものの店の店先でも、必ずといっていいほどの香りに出会う。花を乾燥させたポプリ、プロヴァンス風の美しい布でつく

ったサシェ(匂い袋)、ガラスの小瓶に詰められたエッセンス……。

ラヴェンダーの香りはやすらぎや鎮静効果をもたらすという。雲ひとつない青空にラヴェンダーの風が吹くこの土地では、いつも穏やかで上機嫌でいられるよう、お膳立てされているみたいである。

紫のラヴェンダー畑が美しいといわれるヴォークリューズ高原に行ってみることにした。この一帯を覆う大地は乾いた石灰岩質で、雨水をスポンジのように吸い取ってしまう。その地質がラヴェンダーの栽培に最適なのだそうだ。

一方、吸い取られた雨水はどうなるかというと、地下で不思議な大水脈となつて流れている。その地下水が湧き水となつて噴出しているのが、ラ・フォンテーヌ・ド・ラ・ヴォークリューズ(ヴォークリューズの泉、ソルグ川の水源である。

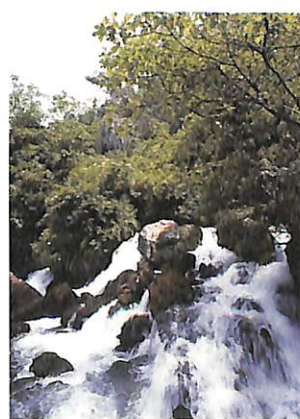
この泉の湧く谷間は、中世の詩人ペトラルカが美女ラウラへの恋心を抱きながら16年間住みついた隠遁地としても知られている。かつて詩人の魂をなぐさめたであろう泉の水は、エメラルドグリーンの宝石を溶かしたように澄みきっている。

この湧き水が飲める水飲み場で、渴いたのをうるおし、小さなミネラルウォーターの空き瓶に水を詰めた。地下をこんこんと流れてきた水は、甘くてまろやかである。

広場の駐車場でラヴェンダー畑の場所を尋ねると、駐車場係のムッシュは、まだ季節が早い、背丈も花もまだ小さいから、と言うのだった。そして世話好きなプロヴァンス人の例に洩れず、先に立ってどんどん歩いていったかと思うと、ほら、と地面を指さしたのだった。そこにはラヴェンダーの小さな茂みがあった。彼は大きなだをかがめて、まだ蕾の硬いラヴェンダーを一本摘んでくれた。

小さなラヴェンダーからは、すつとさわやかな香りがたちのぼった。摘みたての香りを逃がさないよう、泉の湧き水の入った瓶の中にそつと滑り込ませた。瓶の中の水がゆれ、ラヴェンダーがゆれて香りが泉の湧き水にしみとおつていく感触を楽しみながら、谷間を歩いた。

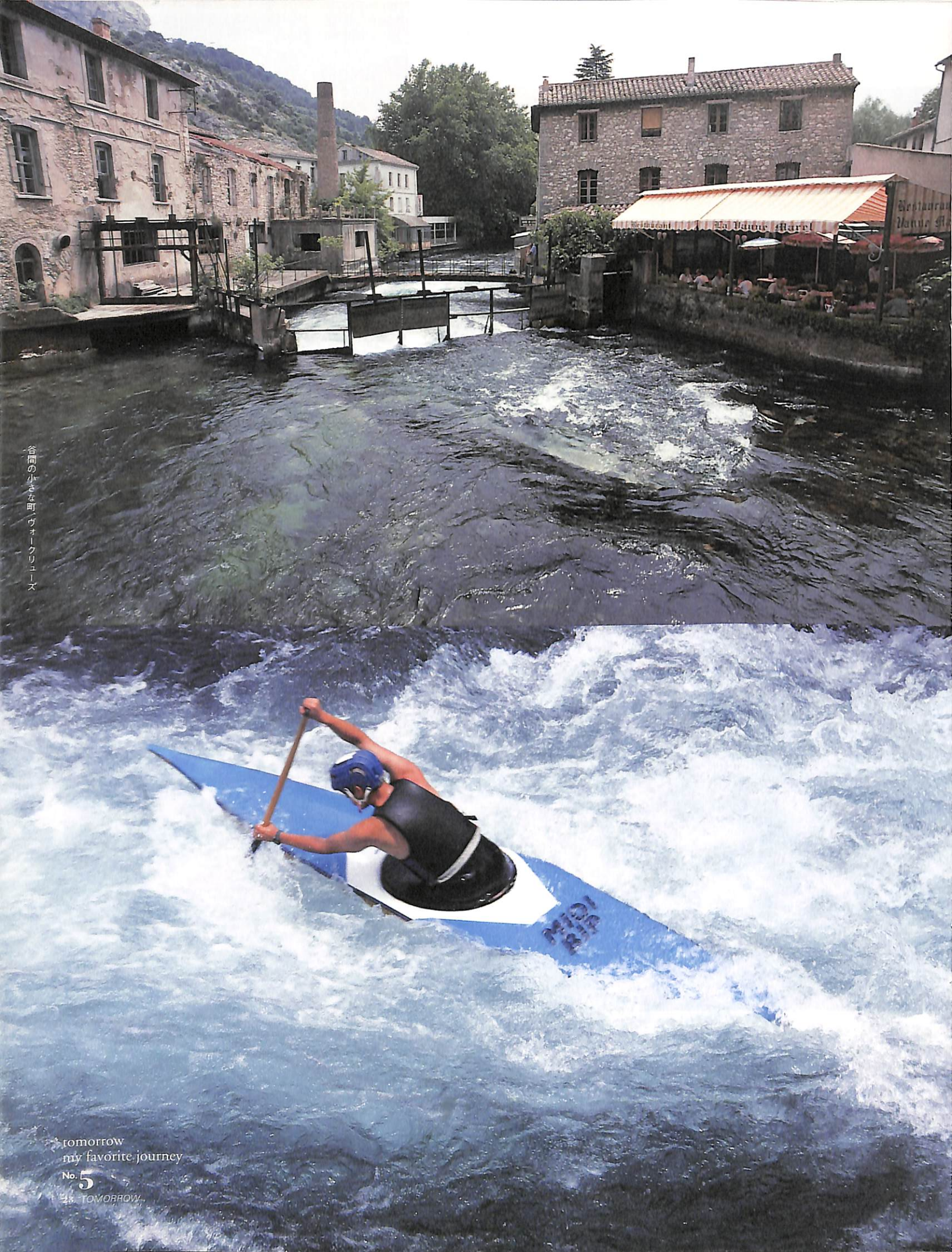
ヴォークリューズの泉から湧き出る豊かな水流



ソルグ川で釣をする少年



木陰で休む観光客



谷間の小さな町、ヴォークリューズ

tomorrow
my favorite journey

No. 5

48 TOMORROW



静謐な光に満たされた内庭回廊

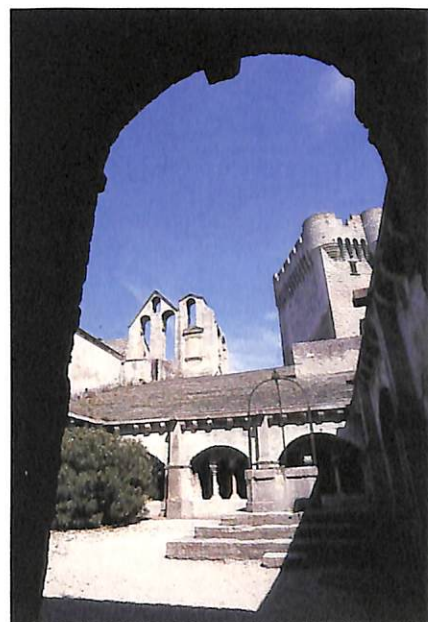
回廊にあふれる 光の静謐

モンマジュール大修道院の内部



プロヴァンスの光を美しい、と感じたのは、色彩豊かな田舎の風景ではなく、修道院の暗がりの中のことだった。アルルの北、モンマジュール大修道院の遺構がそびえる小高い丘は、赤いひなげしが白い岩肌を乱れ咲いている。明るい空の下、石壁がくすれかけた修道院は、夢の廃墟のようにたたずんでいる。内部はひっそりと静まりかえり、自分の足音だけが天井に響きわたる。薄暗い空間をいくつか通りぬけると、12世紀の内庭回廊に出た。

光は、菩提樹の茂る庭から、優美なロマネスク様式のアーチへ、そして影にみちた廊下にこぼれていた。静謐な空間を守る聖なる光。それは、円柱の白い石が透き通ってしまうのではないかと思えるほどの澄んだ光だった。それでいて、蜜のように濃密な光でもあった。その美しさの秘密を探るように、対になった2本の円柱の間からあふれる光を追って、正方形の回廊を巡った。その静謐をこわさないように、そっと。リズムカルに回廊を巡る石の円柱は、



中庭には古い井戸と菩提樹が



ノートル・ダム・ラ・ガルド

One day トリップ Exploring Marseille 地中海の風に吹かれ、 港町の喧騒を聞く

マルセイユは、港町の雑踏の中にまぎれて、潮風の中を無目的に歩きたい町である。いかめしい海の男たち、アラブ人、イタリア人、さまざまな国籍の人間がひしめく町はエネルギーに満ちており、どこかのんびりとした海岸の情緒も感じさせる。

旧港から遊覧船で行く「イフ城」巡りは1時間半ほどの手軽な船旅。海からマルセイユの町を眺めながら、青い海の中の離れ小島にたどりつくと、かつて牢獄だったイフ城がそびえている。ここはアレクサンドル・デュマの小説の主人公モンテ・クリスト伯が幽閉されたことで知られている。暗い地下牢の雰囲気はおどろおどろしい雰囲気に満ちている。

マルセイユには博物館も多く、ここがプロヴァンス最古の町であることを思い出させてくれる。ギリシア人がマルセイユの前身マッサリアを建設したのは、紀元前7世紀のことであった。だがローマ時代、シーザーによって町を徹底的に破壊されたため、遺跡はほとんど残っていない。「遺跡公園」がわずかにギリシア時代の都市の城壁を偲ばせるくらいである。遺跡公園の奥には「マルセイユ歴史博物館」がある。

町の高台にそびえる教会「ノートル・ダム・ド・ラ・ガルド」は、ローマ・ビザンチン様式の壮麗な聖堂が美しい。聖堂を出ると目の前に青い海が広がっている。



旧港。かつては貿易の要だった



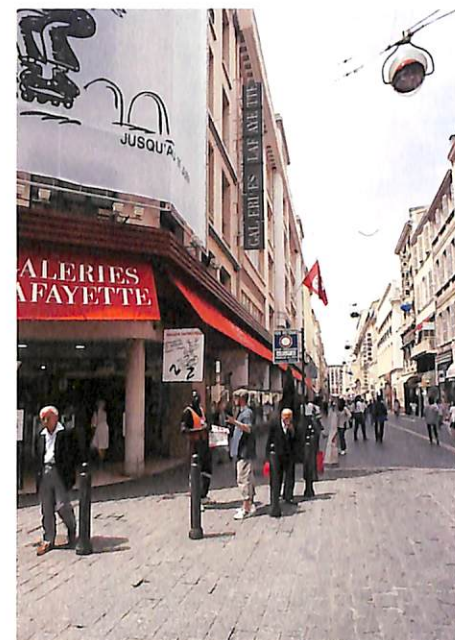
市内にひっそりとたたずむ遺跡公園



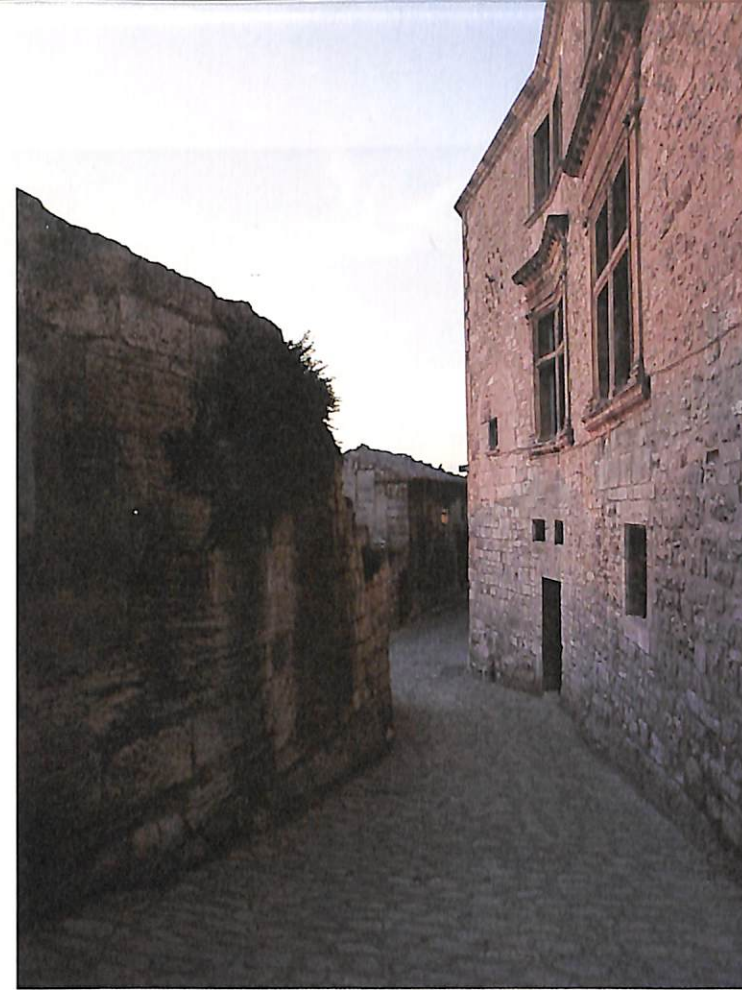
イフ島の船着き場。30分ほどの船旅



かつては牢獄だったイフ城

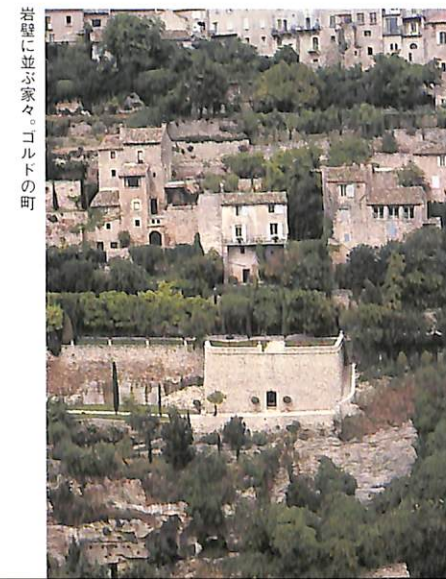


マルセイユの繁華街、サン＝フェレオル通り



石造りの古い家と路地

高台の廃墟の町から眺める



岩壁に並ぶ家々、ゴルドの町



レ・ボアの町並み



夕陽に揺れるポピー

光の音楽を奏でる管楽器のようにも思えた。プロヴァンスの光は古い石に刻まれた数百年の時の重みを無色透明にしてみよう。そこには歴史も飲み込んでしまうような、圧倒的な明るさが満ちているのだ。

プロヴァンスでは、光と闇、昼と夜という対比が成立しない。この光あふれる土地では夜はほんの束の間である。長い午後のあと、弱まった光が最後の長いため息をつくように、黄昏はゆっくりとやってくる。風は柔らかくなり、オールドローズの甘い濃厚な香りがたちのぼる。戸外のレストランでグラスをかたむける以外に最良の過ごし方はないような、優雅な一日の終わりが始まる。オレンジ色の空にようやく一番星がまたたき始めるのは、遅めのディナーがデザートにさしかかる午後10時ころだろうか。それまでずっと、光の酔いは続いている。

LIFE DESK SERVICE INFORMATION

■LIFE DESK パリ
TEL:05-43-95-13
(トール・フリー)
電話受付時間 9:00~18:00 (年中無休)

このほか、ドイツ、スイス、ベルギー、オランダ、イタリア、スペインにLIFE DESKがごさいます。パリ、ロンドンにはレセプションカウンターがごさいますので、パリ方面、ロンドン方面にご旅行の際は、ぜひお立ち寄りください。

厚手の鍋にオリーブ・オイル (50cc) を注ぎ、スライスしたニンニク (4片) アンチョビ (10尾) を入れ、弱火でじっくり炒める。たまねぎ (乱切りで2個) ピーマン (大きめのもの、赤、黄、みどりのものを各1個ずつ、乱切り) セロリ (2cmほどの長さに切ったものを2本分) にんじん (乱切りで2本) なす (厚さ3cmの輪切りを3本) マッシュルーム (縦に2〜3等分したもの15個) カリフラワー (乱切りにしたものを1/3個) ズッキーニ (2cmの輪切りを3本) を入れ、オリーブ・オイル (150cc) を入れ、炒める。そのまましばらくすると野菜から水分が出てくる。出てきたら強火にする。水分が少なくなってきたら白ワイン (400cc) を入れ、煮込む。30分ほどしたらトマトの水煮 (缶のものを1缶) を入れ、オレガノ、塩、コショウで味付けをする。さらに20分煮る。
※このラタティユは煮てすぐよりもしばらく、できれば一晩くらいねかせたほうが味がなじんでおいしい。

西川 治 旅する 胃袋 No.5

ラタティユ

木陰の屋敷 (プロヴァンス)

プロヴァンスの六月の光は、木陰の下にいてもまぶしいくらいだ。葉や枝からこぼれる漏れ光でさえ、白と赤のチェックのテーブルクロスに跳ねかえっていた。ラベンダーやハーブの植えられている遠くの丘の花や葉も白く光っている。

虫の羽音が鈍く耳元でした。
腹をさすった。これもあれもと食べた胃は、はちきれそう。ロジェーじいさんの作った前菜はプロヴァンスの黒いトリフ入りのバテ・ド・フォアグラといたるところだが、ニンニクのふんだんに入った濃厚だが素朴な田舎風レバーバテ。それもトーストよりも厚いぐらいの大切り。一切れ200gはある。それにジャンボ(ハム)が二切れ、ピクルス、プロヴァンス風の名産オリーブの塩漬。赤ワインを飲みながら、それを食べた。前菜だけでけっこう腹が膨れる。だが若いころのぼくは、これぐらいではまだものたりなかった。田舎風の大きなパンを齧り、つぎに出た野菜が何種類も入ったラタティユを食べた。これも皿にちょっと乗っているなんてものじゃない。皿からあふれんばかり。この料理はオリーブ・オイルをたっぷり入れて煮る。それにプロヴァンスでとれるハーブを加える。アンチョビが隠し味。野菜の交響曲を聞いているようなものだ。あらゆる野菜の香り、味覚、歯触りが楽しめる。これで食事は終わりかとおもうとそうではない。甘いリキュールのケーキが出た。

ボーッとしていると、ロジェーじいさんは突然「プロヴァンスの人たちと、ノルマンディやボルドーの人たちとの区別はどうすればいいか知っているかね」と聞いてきた。

さてと首をかしげていると、「なんてことはないさ。体にしみついたニンニクの匂いとオリーブとトマトとハーブの匂いがするだけさ」といった。

「さあ、夜は羊の肉を食べよう」とロジェーじいさんは大きな腹をさすりながらいった。ここの羊の肉がまたとびきり旨いのだ。

午後三時を過ぎたのにますます光は強くなっていった。

羊を胃袋にいれる話より、羊を一匹、二匹、三匹……、十匹まで数えないうちにこのテーブルに凭れ、眠ってしまいそうだった。

にしかわおさむ 写真家・文筆家
1940年生まれ。世界数十か国を旅して遊びと味に精通。ダイナミックな料理人としても評判が高い。著書多数。

文・写真・料理 西川 治



↓スカーフ。
プロヴァンスではよく見られる花柄。
各 FF 85



→ラヴェンダーの匂い袋とエッセンスのセット。
各 FF 34



←ラヴェンダーの石けん。
FF 21

→聖書の言葉が記されている絵ハガキのセット。
FF 20

↓白い表紙はプロヴァンス料理の本。
FF 35
緑の表紙はハーブについて書かれている。
FF 27



←キリスト教のイコン(聖画)。
各 FF 25

↓プロヴァンスを描いた風景画。各 FF 35



↓テリヌの缶詰。左からプロヴァンス特産のウサギ、キノコ、ムクドリ。各 FF 25



↑プロヴァンス地方の民謡が収められたCD。
FF 160



ツアーで楽しむ フランス

プロヴァンスからロワールを抜ける 『フランス紀行』

プロヴァンスの古都アルル、ワインの産地ボルドー、ロワール渓谷、ノルマンディー地方など、南仏からパリへと向かうフランス縦断のツアーがご紹介します。美しい風景とヨーロッパの歴史に触れ、美味しい食事に舌鼓を打つ……。フランスならではの風情を存分にお楽しみいただけます。出発日、料金は以下の通りとなっております。
出発日：9/6、9/13、9/27、10/4、10/25、11/1、11/15、3/14、3/21、3/28 料金：650,000円〜764,000円
最少催行人員10名 (3/21のみ6名)。添乗員が同行いたします。

○左記ツアーのほかにもたくさんのツアーをご用意しております。日程、料金、出発日など詳しくは下記までお問い合わせください。また、本誌掲載込みガキでもパンフレット(無料)のご請求ができますのでご利用ください。
●お問い合わせ先
〒101 東京都千代田区神田駿河台4-3 新お茶の水ビル18F
運輸大臣登録一般旅行代理店第3893号
株式会社ライフトラベルショップお茶の水
TEL: 03-3233-9119